



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第59回日本手外科学会 学術集会を終えて

会長 水 関 隆 也

(広島県障害者リハビリテーションセンター)

目 次

- 第59回日本手外科学会学術集会を終えて
- 2016 JSSH-HKSSH Traveling Fellow 報告記
- ASSH Guest Society
- No man's landからzone IIへの推移は語る
- 第8回 手外科医のリスクマネジメント 「私実践している手術に際しての説明と同意」
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

第59回日本手外科学会学術集会を平成28年4月21日～22日の二日間、広島国際会議場で開催させていただきました。同学術集会は第11回を1968年に広島大学名誉教授、津下健哉先生が、第37回を1994年に同生田義和先生が広島の地にて主催されております。今回は22年ぶりの広島での開催ということになりました。本学術集会を手外科医としての「技」を探求する場のみならず、先達から「手外科の心」を学ぶ場として提供すべく、今回のメインテーマは「究めよう手外科の心と技」とさせていただきます。

特別講演は越智光夫広島大学長、津下健哉、生田義和名誉教授にお願いしました。越智先生には「整形外科、医療、教育、国際化」の演題の下ご講演をいただきました。われわれの大先輩である手外科のパイオニア、津下健哉名誉教授に「手外科の心」と題して、そしてマイクロサージャリーのパイオニア、生田義和名誉教授には「究めよう手外科の技」と題して特別講演をお願いしました。津下先生は後述する事故のため自らの講演は叶わず、代わって生田先生が津下先生になりきり、一人称で講演されました。手外科の心を解説され、拝金主義の現代、医学を数値化し患者を商品化することのないよう戒め、第1会場を埋め尽くした参加者を魅了しました。

海外からは招待演者として米国から、Stanford大学のJames Chang先生、Cleveland ClinicのWilliam Seitz先生、Michigan大学のKevin Chung先生、Minnesota大学のJames House先生、California大学Irvine校のRanjan Gupta先生、スウェーデンからはLund大学のLars Dahlin先生、そして韓国からUlsan大学のIn Ho Jeon先生、ランチョンセミナーにはスイスからSchulthess ClinicのDaniel Herren先生、Mayo ClinicのScott Steinman先生、New York大学のLaurence Hurst先生をお招きしました。いずれの演者も親日家で、多くの本邦友人を有し、会期中に旧交を温めました。

また、教育研修講演として経験豊かな先達に自らの体験を通して、報告された手術手技のうち今でも勧める術式、今ではやらない術式について赤裸々に語っていただきました。そして、治療法に意見の一致をみない疾患について、症例検討を通じて異なる立場から、それぞれの治療法とその結果を紹介していただき、持論の優越性を主張しあっていただくクロスファイアーセッションを設けました。ハンズオンセミナー、ハウトゥセミナーは主に研修医を対象としたプログラムでしたが、多くの会員が集いました。

5題のシンポジウムと7題のパネルディスカッションを組みましたが、このうち5題については海外招待演者にも加わってもらい、熱い議論が交わされました。とりわけ、「エピネフリン入り局麻下の手外科手術」では現在、多くの先進国で認可されながら、日本では認可されていないエピネフリン入り局麻指ブロックの使用認可を後押ししようとの意図で組まれました。

演題の公募に対して、649題の応募をいただきました。いずれも甲乙つけがたい立派な論文でしたが、会場の制約上、パネル/シンポ：27題、一般口演：356題、ポスター：184題、計567題の採用数となりました。開催前より会員の関心の高さが示されていましたが、最終的に広大関係者を含め1741名が参加してくれました。

会も終盤を迎えた22日の昼前、予想もできない事故が起きました。津下先生が骨盤骨折他の大けがを負われたのです。特別講演のためにステージに昇降する階段が苦手とおっしゃっていた先生は、自分で階段を使わずに登壇する方法を探されて、楽屋裏を探索されている間に迷路のように入り組んだ通路を誤り、2階踊り場から転落されたのでしょうか。閉会式の前に生田先生と入院先の広大ICUへ急行し、生田先生が津下先生の特別講演を代行し、先生のメッセージが伝えられたこと、学会は盛会裡に終了できそうなことを報告しました。挿管されており声を発することはできませんでしたが、意識は清明で、大きく何度も頷かれておりました。その後の懸命な治療にもかかわらず、5月1日ご逝去されました。あたかも学術集会の盛会を見届けるような旅立ちでした。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

最後になりますが、失敗談を吐露していただいた研修講演の先生方、それぞれのセッションを盛り上げていただいた座長および演者の先生方、そして最初から最後まで学会を盛り上げていただいた全ての参会者の皆様に準備委員会を代表してお礼申し上げます。



準備委員会のメンバーとともに。第1会場閉会式後

2016 JSSH-HKSSH Traveling Fellow 報告記

小 松 一 成

UPMC Hamot Medical Center, Erie, PA, USA
Orthopaedic Surgery Resident

この度2016 JSSH-HKSSH Travelling Fellowship Awardを頂き、2016年3月10日から18日まで香港の各施設を訪問し、その後3月19日から20日に行われたHKSSH 29th Annual Congressに参加させていただきましたので、ご報告致します。この度の貴重な機会を承認して下さった矢島弘嗣理事長、柴田実担当理事をはじめとする国際委員会の先生方、そして僕を推薦して下さいった南川義隆先生にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。



香港ではP. C. Ho先生に特に世話になり、Ho先生の所属するChinese University of Hong Kong (CUHK)、Department of Orthopaedics&Traumatologyを中心とした見学をアレンジしていただきました。滞在中Ho先生の技術、Leadership、そして人柄にとっても惹きつけられました。実は以前より高月整形外科での恩師南川先生とPittsburghでの恩師のMark Baratz先生からP. C. Ho先生の手関節鏡技術は最先端だからいつか見に行っただ方が良いと言われておりました。実際数年前のシアトルでのASSHでHo先生にお会いして是非いつか見学に伺いたいとお願ひしていた経緯がありました。そんな折、幸いにもJSSHのfellowとして赴いて、見学させて頂ける機会を得ることができ、fellow採択の通知を頂いたときはとても嬉しかったです。

基本的に僕が見学した期間、Ho先生は僕が今まで日本とアメリカで見えてきた手外科手術を全て関節鏡下でやっており、強い感銘を受けました。まずThumb CMC arthroplastyを見せていただきました。Trapeziumを関節鏡下で削り、その後ArthrexのTightRopeを使ってSuspensionしていました。皮切は二カ所合計1cm程度です。術後の痛みがopenと比べて少なく、中期成績は良好とのことでした。次に関節鏡下舟状骨偽関節の手術を見せていただきました。特にすごいと思ったのはmidcarpalportalからcapitate越しにscaphoid waistの骨折部をしっかりと見ながらnon-union siteのdebridementを関節鏡下で行えている事でした。Openで骨折部をルーペを使って見るよりもしっかりとdebridement後の骨折部の出血の有無が見えます。Pinを3本挿入した後にallograftとBMP2

をgraftしていました。先生はProximal pole non-unionの症例でも同手術をまず行い、vascularized bone graftを行う症例が減ったとのこと。さらに今回の滞在のhighlightとして、関節鏡下 DRUJ reconstructionを見せていただきました。アメリカではdorsal capsuleを大きく開けてPLを使って再建するAdams procedureが一般的ですが、Ho先生はdorsal, volar, ulna shaft部の小さな皮切のみで関節鏡下でやってしまいます。TFCC foveaへPL graftを通す位置などは関節鏡下でしっかり視認できるので有用だと思いました。手術時間はやはりopenと比較すると長いですが (DRUJ reconstructionは4時間かかりました)、今後さらに発展していく分野であることは間違いなく、適応も拡大していくはずだと確信しました。また今までお世話になってきた第一線にいらっしゃる先生方と共通していることと思うのですが、Ho先生のご自身の技術、手術のPearls and Pitfalls等を喜んで惜しみなく僕のような外部の人間に対して教える姿勢は、とても素晴らしいことだと感じました。Ho先生がご自身の手関節鏡の技術を詳細に記載したopen accessの論文がありますので、興味のある先生方は下記を参照していただければと思います。(Advances in arthroscopic surgery of the wrist: from resection to reconstruction, PC Ho, medicina fluminensis 2015, Vol. 51, No. 1, p. 52-89) また先生が主催されている手関節鏡Workshopが毎年12月に同大学で行われており、是非いずれ参加したいと思いました。

滞在中はPrince of wales hospitalではGround roundにて研究の発表をさせていただく機会がありました。そちらでは臍幹細胞シートを使った研究内容を発表しました。主任教授のCheng先生から今後の整形外科分野での再生医療の適応についてfeedbackを頂きとても有意義でした。CUHKの研究室も見学する機会がありました。すでに臨床で自家由来幹細胞移植を骨折non-unionの患者に使用したclinical trialを行っているようです。同大学には莫大な予算が降りており、手術室での



Ho先生ご夫妻との夕食



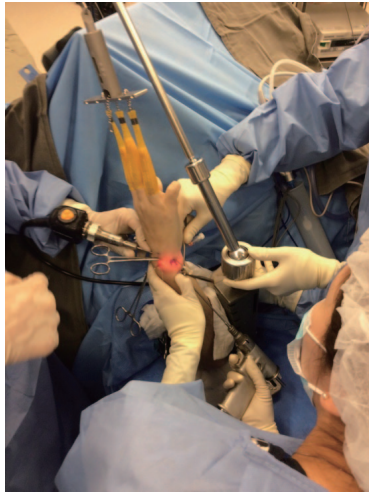
Ho先生の息子さんのコンサート (左から二番目)



Hand teamと



CUHKにて



手術風景



Hand Teamとの夕食会



Prince of Wales Hospital前にて

人細胞移植が可能なCDC施設もしっかり整っていました。また今回はたまたまNYのHospital for special surgeryのchief residentも見学に来ていて、色々意見交換しながら一緒に行動できたことが良かったです。P. C. Ho先生はセミプロレベルのハーモニカ奏者ですが、先生の息子さんはプロのハーモニカ奏者として活動されていて、彼のグループのコンサートと一緒に連れてって頂く機会にも恵まれました。また香港の地元の知る人ぞ知る大衆食堂にも連れて行って頂きました。

さて訪問の最後2日はHKSSH meetingに参加させて頂きました。こちらではSLFJ PIP arthroplastyについて発表しました。なんとたまたまこの発表の論文で多数referenceさせていたMayo clinicのPeter Murray先生が招待教授としていらっしやっており、発表後はpositiveなfeedbackを頂き、先生が作ったSRA PIP implantができるまでの苦労話も話して頂きました。またgrowth plateを含めたfree fibula graft等で高名なイタリアのmicrosurgeonのMarco Innocenti先生も招かれていて、様々な再建後の素晴らしい結果を発表されていて、とても良い刺激になりました。

約1週間という短い時間ではありましたが、Ho先生の手関節鏡手術見学、施設見学、発表とfeedback、高名な先生方との交流等、今後の僕の手外科医としてのキャリアに非常に有意義な経験となりました。JSSHからのTravelling Fellowとしての立場がなければこのような実りのある1週間とはならなかったはずです。改めましてこのような機会を頂いたことに感謝申し上げます。今後も両学会友好の歴史と発展が続いていきますことを祈念しております。

The image shows a two-page brochure for the Hong Kong Society For Surgery of The Hand (HKSSH) 29th Annual Congress. The left page features the title '29th Annual Congress' in English and Chinese, along with a grid of hand and wrist X-rays. It lists 'HIGHLIGHTS' such as tumours, infections, and reconstructive surgery, and an 'INTERNATIONAL FACULTY' including Peter Murray (USA), Marco Innocenti (Italy), and Ton Schreuders (Netherlands). The main theme is 'UPPER LIMB TUMOUR & INFECTION' with sub-themes 'Clearance · Reconstruction · Rehabilitation'. The dates are '19 - 20 MARCH 2016' and the website 'www.hkssh.org' is provided. The right page is titled 'HKSSH Visiting Scholar 2016 (Asia-Pacific)' and 'HKSSH-JSSH Ambassador 2016'. It features portraits and biographies of Dr. Ahmad Saigam Bahar Masi and Dr. Issei KOMATSU, detailing their clinical and academic backgrounds.

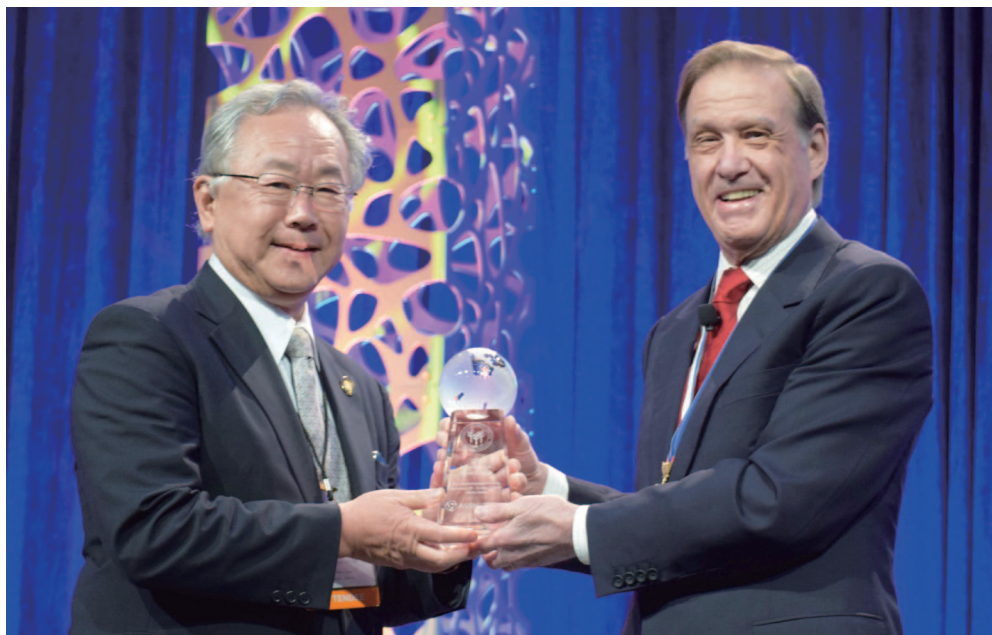
HKSSH学会のパンフレット

ASSH Guest Society

国際委員会委員長 和田卓郎

第71回米国手外科学会 (ASSH) は2016年9月28日～10月1日の期間、テキサス州オースチンで開催されました。オースチンは人口が85万程度ですが、IT産業を核として経済発展と人口増加が著しいテキサス州の州都です。バーベキューと音楽(ロック)が観光の売りです。ASSHの開催地はボストン、シカゴ、シアトル、サンフランシスコに固定されていましたが、今回は新しい試みとしてオースチンを選んだようです。

JSSHは本学会2度目のGuest Societyに選出されました。JSSHは、2007年シアトルで開催された学会で第1回のGuest Societyに選出されています。Guest Societyに2回選出されたのはJSSHが初めてであり、大変名誉なことです。開会式では矢島弘嗣理事長がNeil Johns学会長から大変立派で重みのあるトロフィーを授与されました。実際、10kgくらい?あるそうです。矢島理事長が持ち帰ったトロフィーは第60回日手会学術集会で展示しますので、ぜひご覧ください。



本学会には144名のJSSH会員が参加しました。一般口演が5題、一般e-posterが18題、i-poster (Guest Societyのe-poster) 79題が採択されました。全ポスター297題中97題(33%)が日本からの演題でした。JSSH会員はPre-courseやInstructional Course Lecture、シンポジウムの演者、Scientific Sessionの座長と多方面で活躍しました。Johns会長からはJSSHが本会に多大な貢献をしたとお褒めの言葉をいただきました。

Social Activityにおいても温かいおもてなしを受けました。第1日目の朝にはAmbassador Welcome Breakfastが行われました。JSSHとASSHメンバーが朝食を取りながら交流しました。Terry Light先生が歓迎のスピーチで場を盛り上げてくれました。第2日目の夕方にはInternational Receptionが開催されました。お酒、食事を楽しみながら世界各国のHand Surgeonと交流を深めました。日本食が振る舞われ、ステージではカラオケが準備されました。JSSHメンバーの熱唱が会場に響き渡りました。ASSHとJSSHの格別の友好関係は、長年にわたり学際的、また個人的にASSHと交流を続けてきたJSSHの先人のおかげであることは言うまでもありません。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

今回のASSHの特徴は、一般口演を絞り込み、シンポジウム、ICLを主体にプログラムが組まれていた点です。一般口演では、演者が5分間の発表をした後、座長が2分間で発表の要旨・コメントを述べ、実際の質疑応答はありませんでした。しかも、演者も座長も時間をオーバーすると自動的にマイクを切られるという厳しいルールが運用されました。このスタイルにはASSHの中でも賛否が分かれたようですが、Webアンケートを基にした評価とフィードバックがなされることでしょう。ASSHでは、学会開催地決定を含め、プログラム作成は学会主導でなされます。今回のプログラム責任者はDr. Ranjan Gupta, Dr. Tamara Rozentalのお二人で、共にBunnell Fellowで日本を訪問したASSHの次世代リーダー達です。若いリーダーに責任を持たせ、思い切ったことをやらせる、そして適切なフィードバックを与えるのがアメリカ流と感じました。失敗を恐れない文化がASSHのエネルギーの源と考えさせられました。

最後になりますが、第71回ASSHに参加してくださったJSSH会員の皆様に心からお礼申し上げます。

No man's landからzone IIへの推移は語る

認定NPO法人 健康医療評価研究機構 上羽康夫

1980年オランダのアムステルダムで開催された第1回国際手外科学会に出席してから直ぐにスイスに向かった。Dr. Verdanの講義を聴くためであった。講義には世界各地から約50名の手外科医が参加していた。

1946年Dr. Bunnellと34名の医師によってアメリカ手外科学会が創設された。しかし、1950年代でも我が国では「手には手を付けるな」と教えられた時代であった。特に指基節部での指屈筋腱修復の術後成績は極めて悪く、Dr. Bunnellでさえも此の部をno man's land (図1)と呼んだ。当時は、この部位で腱を縫合すると周囲組織からの肉芽組織が侵入して修復するので腱と周囲組織とは必ず癒着し、それはやむを得ないと考えていた。しかし、1960年代初期にVerdanはこの難題に立ち向かい、手内の腱修復術成績を分析し、部位による術後成績の格差を指摘した^{1,2)}。

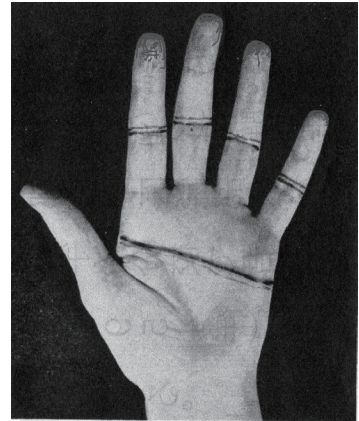


図1. No man's land (Bunnell)
(Boyes JH: Bunneii's Surgery of the Hand 4th ed. p.594, Lippincott Co., 1964より)。

1971年にVerdanが手掌側7zones (図2)を発表すると、基礎研究が本格的に始まった。アメリカではDoyleらが指屈筋腱鞘の詳細な構造を研究し、腱鞘には滑液鞘と繊維鞘(=滑車 pulley)があり、滑車の数、位置、役割などを明確にした³⁾。スエーデンのLundborgは腱が関節内液のみでも自己修復しうることを発見した⁴⁾。我国では石井はin vitro実験で腱組織自体の治癒能力を持つことを実証し⁵⁾、松井は腱鞘に包まれた屈筋腱の血流は極めて乏しく、主として腱紐vinculaを通る血管により維持されていると報告した⁶⁾。

それらの基礎研究により指屈筋腱治療法は大きく変化した。それまで、Hunter's rodを先ず挿入して腱鞘を作成し、二次的に遊離腱移植術を行うのが主流だった⁷⁾。だが、研究成果に基づいてKleinertらは腱縫合後に早期運動療法を行い⁸⁾、腱血流を保ちつつ強固な腱縫合が得られる津下法⁹⁾などの導入によって腱縫合成績は飛躍的に向上した。

Verdanの手掌側7zones式が米国に導入されると、Schneiderらはそれを5zones式に簡素化した。その分類法が現在では最も広く使われている。今ではzone IIと呼び、手外科を習得した医師には手術が許されるsomeone's landと呼ばれる。我国の指屈筋腱機能評価表では、zone IIを更に3つのsubzonesに細分化したDuranらの意見を取り入れ、母指には「T」を付して他指zoneと明確に区

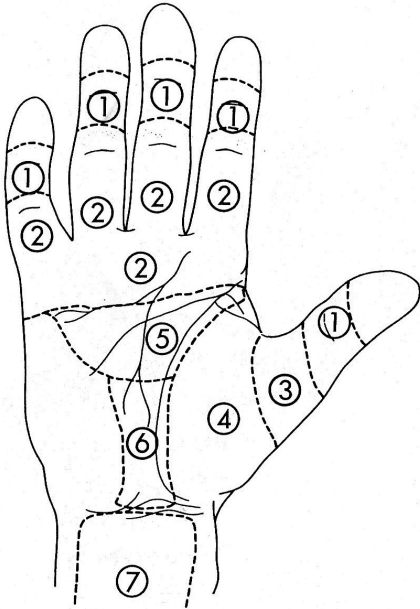


図2. 手掌側7zones (Verdan式)
 (Verdan CE et al : Symposium on the Hand 3: p.198,
 Mosby Co,1971より)。

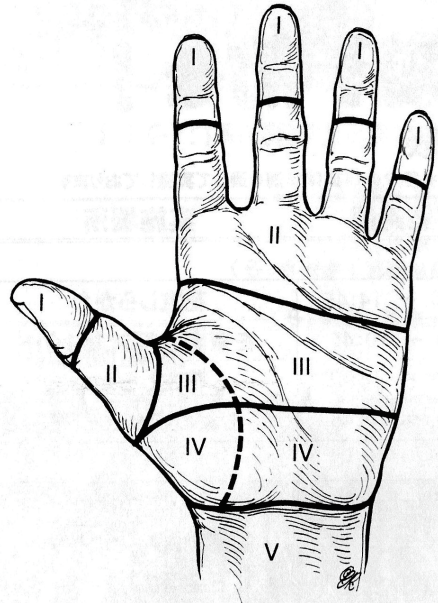


図3. 手掌側5 zones (Schneider式)
 (Schneider LH & Hunter JM: Operative Hand Surgery 3rd
 ed. p.1855, Churchill Livingstone, 1993より)。

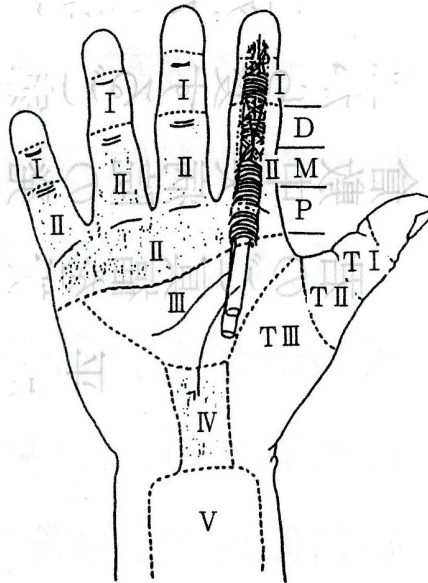


図4. 手掌側5 zones + T zones (日手会式)
 (日本手の外科学会手の外科機能評価表 第4版 :p.1、2006より)。

別している¹⁰⁾(図4)。

これら3種のZone式を比較すると欧州のVerdanは手の局所解剖学的特性に基づくZone式を開発し、米国のSchneiderは利便性を導入し、日手会は緻密性を重視したのであろう。3種のZone式の違いは小さいようであるが、非常に興味深い。

参考文献

- 1) Verdan CE: Primary repair of flexor tendons. J Bone Joint Surg 42-A: 647-657, 1960.
- 2) Verdan C: Practical considerations for primary and secondary repair in flexor tendon injuries. Surg Clin North Am 44:951, 1964.
- 3) Doyle JR, Blythe WF: The finger flexor tendon sheath and pulleys. Anatomy and reconstruction. pp. 81-87. AAOS Symposium on Tendon Surgery in the Hand. CV Mosby, St. Louis, 1975.
- 4) Lundborg G: Experimental flexor tendon healing without adhesion formation - a new concept of tendon nutrition and intrinsic healing mechanisms. A preliminary report. Hand 8:235-238, 1976.
- 5) Ishii S et al: Studied on the adhesion of digital flexor tendon; Part 1. Growth of chick embryo tendon tissue in vitro. J Jpn Orthop Ass 48: 541-548, 1974.
- 6) 松井 猛 : 人手指屈筋腱の微小血管学的研究—正常腱の血管分布および腱やVinculaへの損傷が腱血管分布に及ぼす影響について。日整会誌53:307-320,1979.
- 7) Hunter JM: Artificial tendons. Early development and application. Am J Surg 109:325-338,1965.-
- 8) Kleinert HE. Kutz JE, Cohen HJ: Primary repair of zone 2 flexor tendon lacerations. P.91. AAOS Symposium on Tendon Surgery in the Hand. CV Mosby, St. Louis, 1975.
- 9) Tsuge K, Ikuta Y, Matsuishi Y: Intra-tendinous tendon suture in the hand. A new technique. Hand 7:250-255, 1975.
- 10) Duran RJ, Houser RG: Controlled passive motion following flexor tendon repair in Zones 2 and 3.pp105-114,AAOS Symposium on Tendon Surgery in the Hand. CV Mosby, St. Louis, 1975.

私が実践している手術に際しての説明と同意

宇治武田病院 勝見泰和

各都道府県医師会には医療安全対策委員会などがあり、医療安全対策や裁判外紛争解決(ADR)を目的として活動している。活動方針は医療従事者の安全教育と患者さんへの啓蒙活動である。このような活動にもかかわらず、患者さんと医療人の思いにはすれ違いが依然として大きく存在する。今回は手外科医としてリスクが高い手術を取り上げ、私が実践している手術に際しての説明と同意を述べてみる。

手術の説明・同意に関して、ADRの顧問弁護士は「医療契約は**準委任契約**であり、結果を保証した**請負契約ではない**。しかしながら、結果が悪い時には**期待権侵害**が問われ、賠償が求められることがある。それゆえ、手術内容、成績、合併症についてはできるだけ詳しく説明してください」と強調される。私もできるだけ非専門的な言葉で、手術内容や手術成績、そして感染・神経損傷、CRPSなどの合併症について時間をかけて説明するように努力している。

さて医師には診療上、数々の裁量権が認められており、外部からの不当な干渉を受けずに患者さんの利益を第一として診療に従事する必要がある。診療上の独立性・自律性はいわゆるプロフェッショナルオートノミーとして容認されている。反面、医師は身を正して医療上の知識や技術の向上に努めなければならない。長年、医療はパターンリズムとして「医師の善意に基づく慈善の行為」であるとされてきた。近年は患者さんの決定権を尊重すべきで、インフォームド・コンセント(説明と同意)の重要性が強調されている。しかしながら、まだまだ日本ではパターンリズムを望む患者さんが多い。それを補足することから、「**手術を受けられる患者さんへ**」というパンフレットを前もって全員に渡しており、患者さんの信頼が揺らぐことがないように日々研鑽している。

「手術を受けられる患者さんへ」

このたびは手術を受けられることが決まり、不安な気持ちでおられると思います。私たちは患者さんを「**私たちの家族**」と考え、安全で最良の結果が得られるように最善の努力を払っています。しかしながら、人間の体は複雑にできており、予期せぬことが発生することがあります。また手術前の診断を変更しなければならぬこともあり、方法を変更することもあります。つまり**医療には不確実な面**が存在します。手術前に主治医から説明がありますが、手術に関する一般的な事項についてご理解ください。

- 1) 手術成績には優・良・可・不可があります。どんな名医が手術をしても残念ながら100%完璧な手術はありません。いわゆる**神の手の手術は存在しません**。しかしながら、私どもは手術が常に**最良の結果が得られるように最善の努力**を払っています。
- 2) 手術前の診断とは異なる所見となることがあり、手術にて確定診断がされることもあります。
- 3) 手術前の「手術の説明と同意」の際には、手術の目的、方法、必要性と効果(成績)、危険性と合併症について十分に説明を受けてください。

手術等全般を含む「手術の説明と同意」については、手術までに主治医から十分に説明し、署名をいただいております。その危険性を踏まえても、手術を受けられることが患者さんの利益につながることを患者さん、御家族が同意されたうえで、手術を受諾するということをご理解ください。このご理解なしに手術をお受けになることはお薦めできません。もちろん私たちはできるだけ手術がうまくいくように、またできるだけ安全に行われるように手術に臨んでおります。

関連学会・研究会のお知らせ

◆第34回中部日本手外科研究会◆

会 期：平成29年1月28日(土)
会 場：高知市文化プラザかるぼーと
会 長：野口 政隆(医療法人瑞洋会 田中整形外科病院)
詳 細：<http://www.e-g.co.jp/jssh34chubu/>

.....

◆第29回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：平成29年2月3日(金)～4日(土)
会 場：ヒルトン東京お台場
会 長：稲垣 克記(昭和大学 医学部 整形外科講座)
詳 細：<http://procomu.jp/elbow2017/>

.....

◆第31回東日本手外科研究会◆

会 期：平成29年2月11日(土)
会 場：北海道立道民活動センター かでの2・7
会 長：青木 光広(北海道医療大学リハビリテーション科学部)
詳 細：<http://www.c-linkage.co.jp/ejssh31/>

.....

◆第38回九州手外科研究会◆

会 期：平成29年2月18日(土)
会 場：北九州国際会議場
会 長：酒井 昭典(産業医科大学整形外科学)
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/khand/>

.....

◆第60回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：平成29年4月12日(水)～14日(金)
会 場：大阪国際会議場
会 長：細川 亙(大阪大学大学院医学系研究科外科系臨床医学専攻 器官制御外科学講座 形成外科学)
詳 細：<http://www2.convention.co.jp/jsprs60/>

.....

◆第60回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成29年4月27日(木)～28日(金)
会 場：名古屋国際会議場
会 長：平田 仁(名古屋大学大学院医学系研究科 運動・形態外科学 手の外科)
詳 細：<http://www.jssh2017.jp/>

◆第29回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：平成29年4月28日(金)～29日(土)

会 場：名古屋国際会議場

会 長：茶木 正樹(中日病院 名古屋手外科センター)

詳 細：<http://meeting29.jhts-web.org/>

.....

◆第23回春期教育研修会◆

会 期：平成29年4月29日(土)

会 場：名古屋国際会議場

主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

.....

◆第90回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：平成29年5月18日(木)～21日(日)

会 場：仙台国際センター、東北大学百周年記念会館(川内萩ホール)、せんだい青葉山交流広場

会 長：井樋 栄二(東北大学大学院医学系研究科外科病態学講座整形外科学分野)

詳 細：<http://www.joa2017.jp/>

編集後記

近年、私たちを取り巻く環境は、技術革新に支えられてアナログからデジタルに変化し、“従来型の世の中の豊かさ”は、すでに米国では80年代に、また日本では90年代に終焉を告げました。現在は、“停滞の時代”とも言われ、自然災害を含めて予測不可能な状況が続いています。

今年生じた英国のEU離脱や、“革命”とも言われる米国大統領選挙の結果は、これまで声高に叫ばれてきた”グローバル化や多様性“のひずみを暗示しているように感じます。このように価値観や考え方が劇的に変化する状況の中で、今後はこれまでの発想を変えた”革命的”な技術革新が必要となることが予想されます。

今回の日手会ニュース46号では、“No man’s landからzone IIへの推移は語る”の中で、分類の背景にある興味ある歴史について上羽先生にご執筆頂きました。また、和田卓郎先生 (ASSH Guest Society) および勝見泰和先生 (手外科医のリスクマネジメント) がご寄稿下さいました。日手会が激変する世界の時の流れをリードし、さらに発展することが期待されます。

いつの間にか残りわずかとなった2016年カレンダーに、時の移ろいの早さを実感する師走が巡って参りました。2017年が日手会会員の皆様にとって益々よい一年となりますことを心より祈念申し上げます。

(文責：磯貝典孝)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一，アドバイザー：千馬誠悦，委員長：白井久也
委員：磯貝典孝，岡崎真人，佐竹寛史，辻 英樹，日高典昭)